

Title	W・ E・ B・ デュボイとパン・ アフリカニズム： 一九〇〇年から一九一九年までの時期を中心として
Sub Title	W. E. B. Du Bois and Pan-Africanism
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究：法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.10 (1970. 10) ,p.269- 289
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	潮田江次先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19701015-0269

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

W・E・B・デュボイとパン・アフリカニズム

——一九〇〇年から一九一九年までの時期を中心として——

小 田 英 郎

一、序 論

二、一九〇〇年パン・アフリカ会議とデュボイ

三、谷間の時期のパン・アフリカニズム

四、一九一九年パン・アフリカ会議とデュボイ——パン・アフリカニズムの復活——

五、結 論

一、序 論

本稿は、W・E・B・デュボイ⁽¹⁾の思想と行動に照明をあてながら、前期パン・アフリカニズムの形成過程を明らかにし、かつその特質を浮き彫りにしようとする一試論である。

W・E・B・デュボイは一八六八年に合衆国マサチューセッツ州・グレイト・バーリントンに生れた混血の黒人で、フィスク大学（一八八五―八年）、ハーバード大学（一八八八―九〇年）、ベルリン大学（一八九二―四年）に学び、一八九六年にはハ

ハーバード大学からPh.Dを取得し(黒人で同大学からPh.Dを取得したのはデュボイが最初といわれる)、その後一九一〇年までの四年間アトランタ大学教授(経済学、歴史学)をつとめた。さらに、二二年のブランクを経て一九三二年にはふたたびアトランタ大学に復帰し、社会学教授として一九四四年までの一二年間同大学の教壇に立つた。この間、そしてその後も(一九六三年にガーナ市民として九五歳で没するまで)かれは一貫して黒人問題、アフリカ問題を論究し、*The Suppression of the African Slave Trade to the United States of America, 1638-1870* (1896); *The Philadelphia Negro*(1899); *The Souls of Black Folk* (1903); *John Brown* (1909); *The Quest of the Silver Fleece* (1911); *The Negro* (1915); *Darkwater* (1920); *The Gift of Black Folk* (1924); *Dark Princess* (1928); *Africa: Its Geography, People and Products/ Africa, Its Place in History* (1930); *Black Reconstruction in America, 1860-1880* (1935); *Black Folk, Then and Now* (1939); *Dusk of Dawn* (1940); *Encyclopedia of the Negro* (1945); *Color and Democracy* (1945); *The World and Africa* (1947); *In Battle for Peace*(1952); *The Ordeal of Mansart* (1957); *Mansart Builds a School*(1959); *The Worlds of Color*(1961); *An ABC of Color*(1963)等、数多くの秀れた著書を世におくり、またこのほか数えきれなほどの論説や *Annals of the American Academy of Political and Social Science*; *Crisis*; *Atlantic Monthly*; *Current History*; *Foreign Affairs* その他に寄稿している。「デュボイ博士は五〇年以上にわたつてニグロ作家の長老であり、その民族のもつともすぐれた知識人と考えられていた。何千人もの若いニグロの男女は、作家、編集者、演説家、教師、それに人種問題の伝達者でもあるデュボイを自分たちの模範として仰ぎ、かれに導かれ鼓舞激励されてきた」というラングストン・ヒューズの言葉は、デュボイの絢爛たる著作一覧表を眺めれば首肯されえよう。

しかしながら、デュボイはたんなる書斎人ではけつてなかつた。かれは、合衆国黒人ばかりでなく全世界のアフリカ系人の「主体性の確立」をその著作のなかでさげんだけかりでなく、実践運動を通じてその実現に努力したのであつた。すなわちデュボイは、はやくも一九〇〇年には、ロンドンで開催されたパン・アフリカ会議に参加し、さらに一九〇五年にはナ

イアガラ運動 (The Niagara Movement) を組織して合衆国黒人の意識高揚・地位向上のために積極的な活動を開始した。このナイアガラ運動は、一九〇九年には発展的に解消して全米黒人向上協会 (The National Association for the Advancement of Colored People、略称 NAACP) となるが、デュボイはその創立者の一人として同協会の理事会に連り、かつ宣伝・調査の責任者として協会の機関誌「クライシス」(The Crisis) の編集を担当した。しかも協会の活動が軌道に乗りはじめた一九一〇年には、デュボイはアトランタ大学を去つて、「経済的にはなんの保証もない NAACP と運命をともしることとなつた」(ラングストン・ヒューズ) ののであるが、この一事をもつてしても、デュボイが「徹底した実践者」であつたことが分かるのである。

また国際的舞台では、前述の一九〇〇年パン・アフリカ会議につづいて、一九一一年の第一回万国人種会議 (The First Universal Races Congress、ロンドン) に参加し、その後は一九一九年(パリ)、一九二一年(ロンドン・ブラッセル・パリ)、一九二三年(ロンドン・リスボン)、一九二七年(ニューヨーク)、一九四五年(英国マンチェスター) と五回にわたるパン・アフリカ会議を組織・主宰し、第二次大戦後にいたつて抬頭したアフリカ・ナショナリストの手にパン・アフリカニズムのバトンを引き渡す重要な役割をはたした。⁽⁴⁾ デュボイはかくて、合衆国内部における黒人運動と、国際的舞台における「アフリカ・アフリカ人・アフリカ系人の復権運動」の両面で多大の貢献をしたのであつた。ことに今世紀初頭にはじまつた「アフリカ・アフリカ人・アフリカ系人の復権運動」ニパン・アフリカニズムは、その形成期をまさしくデュボイのもとで送つたといつてよい。かかる意味において、まことにデュボイは「パン・アフリカニズムの父」である。

このように、デュボイとともに発展した前期パン・アフリカニズムは、しかしながら、その過程においてかならずしも一貫して上昇線をたどつていたわけではない。むしろ、そこには大きな起伏がある。すなわち、一九〇〇年パン・アフリカ会議から一九四五年パン・アフリカ会議までのあいだで、一応高揚期とされうるのは、象徴的には一九一九年会議から一九二

七年会議までの八年間にすぎず、それもピークは一九一九年から一九二一年までで、それ以後運動は下降しはじめるのである。

この小稿では、右のうち一九〇〇年パン・アフリカ会議から一九一九年パン・アフリカ会議にいたるまでの時期を対象として、一九〇〇年に生を享けながらその後、「一世代のあいだ死んでいた」とされるパン・アフリカニズムが、いかにして復活し、その形を整えていつたかをW・E・B・デュボイの「思想と行動」との関係において論述してみたい。

(1) Du Bois という名前の読み方は、日本では「デュボイス」、「デュボア」のふた通りがある。これはいずれも根拠のある読み方で、かつては筆者も「デュボア」と発音していたが、一九六八年から一九六九年にかけてポストン大学アフリカ研究センターに在籍したさい、Du Bois と個人的に接触のあったウィリアム・O・ブラウン名誉教授から、本人は「デュボイ」と発音していた旨知らされ、以来その読み方を採用している。

(2) Langston Hughes, *Fight for Freedom*, Berkeley Publishing Corp., 1962. 北村崇郎訳『自由のための戦列——NAACPの記録——』・昭和四五年・小川出版・一三頁。

(3) 前掲・一三頁。

(4) この点については、拙稿「現代アフリカとパン・アフリカニズム——アフリカにおける主体性の問題を中心として——」・法学研究・第三七巻第四号を参照されたい。

二、一九〇〇年パン・アフリカ会議とデュボイ

「二〇世紀の問題はカラー・ライン——アジア・アフリカ・アメリカおよび海洋の島々における色の黒い人びとと色の白い人びととの関係——の問題である⁽¹⁾。これは、デュボイが一九〇三年に出版した名著『黒人のたましい』のなかの一句であるが、デュボイを語るすべての人がほとんど例外なく引用することの有名な言葉は（二〇世紀の問題はカラー・ラインの問題である」という部分に関するかぎり、もともと一九〇〇年パン・アフリカ会議でかれが起草した「世界の諸国への請願」と題する決議のなかにもられたものであるが）、この当時におけるかれの黒人問題観、アフリカ問題観、人種問題観がどの程度のものであつたかを知る

うえて参考になる。この当時、すなわち一九〇〇年前後の時期においては、デュボイのパン・アフリカニズムは、まだほとんどその形をととのえていなかつた。たしかに、二〇世紀の問題をカラー・ラインの問題とみたのはまことに深い洞察であり、またデュボイの視野の広さをもの語るものではあつたけれども、その反面、(合衆国黒人を含めた)非アフリカ世界のアフリカ系人の問題、アフリカにおけるアフリカ人の問題が、十分整理されないままに、全世界の有色人種全般の問題のなかで、かすんでいたように思われるのである。

もちろんデュボイは、文化的側面でもまた政治的側面でも、合衆国の黒人問題とアフリカにおけるアフリカ人問題を理論上は有機的に結びつけていた。たとえば一八九七年にデュボイは「人種の保存」と題する一文のなかでつぎのように述べている。

「ニグロ人民の前衛——アメリカ合衆国にいるニグロの血を受けついで八〇〇万人民——は、もし自分たちがパン・ネグロイズムの先陣のなかで本来の位置を占めるならば、自分たちの運命は白いアメリカ人によつて吸収されることではない、ということ、ただちに理解するようにならねばならない」

右の言葉からも分かるように、デュボイは合衆国黒人を全世界的な黒人運動の前衛として位置づけること、および白人による文化的同化を拒否することを、一八九七年の時点ですでに主張していたのである。そしておそらく、このようなデュボイの主張を根拠としてであろうが、E・U・エシエンウッドは「ニグロ・アメリカニズムのもつ国際的含意がデュボイを一八九七年にパン・ネグロイズムへと導いたのだ」(傍点・引用者)と述べている。この点に関するかぎり、エシエンウッドの把握はただししい。

しかし、この時期におけるデュボイの主張は、あくまでもニグロ国際主義としてのパン・ネグロイズムであつて、「母国アフリカの独立・統一を志向する」という意味でのパン・アフリカニズムではなかつた。すなわち、「一個の人種としてわ

われれば、人間相互間の相違を自由に認知するが同時に発展の機会における不平等を厳しく非難するような、ヨリ広い人権の実現のために、人種組織、人種の連帯、人種の統一によつてたかかねばならない⁽⁴⁾という主張からも分かるように、かれはこの当時、問題を主として人種問題の角度からみていたのであつた。力点は「人種としてのニグロ」におかれていたのであり、「民族問題としてのアフリカおよびアフリカ(系)人の問題」という認識は、まだ生れてはいなかつたように思われる。

デュボイが一九〇〇年に開催されたパン・アフリカ会議に参加したのは、こうした意識状況のもとにおいてであり、そこではじめてデュボイは、ナマのままの「アフリカ問題」に遭遇するのである。

一九〇〇年七月二十三日から二十五日にかけて、主としてイギリス、西インド諸島から(そして少数の合衆国からの)代表約三〇名を集めてロンドンで開催されたパン・アフリカ会議は、トリニダード出身の弁護士ヘンリー・シルヴェスター⁽⁵⁾ウイリアムスによつて組織されたものであるが、同会議ではデュボイは決議委員会委員長として「世界の諸国への請願」の起草にあつた。

「一九世紀の終末を告げるこの年、現代世界の中心都市において、黒色諸人種の現状と将来について厳肅に審議するため、アフリカ人の血を引く男女が会議を開いた」という言葉ではじまるこの決議は、さらにつづけて「二〇世紀の問題はカラー・ラインの問題である」という展望をうちだし、そのうえで九項目からなるアピールをおこなっているが、「われわれは大胆にかつ信頼の念をもつて、文明世界の諸大国に対し……わが主義主張の正当性を寛容の精神をもつて承認するよう訴えるものである」というその結びの文句からもうかがい知れるように、それは文字通り「請願」であり、目標をたたかいたるといったような調子の高さは、まつたく感じとれないのである。⁽⁵⁾また、九項目からなるアピールのうち五項目で直接アフリカに關係した問題をとりあげているが、そこでもたとえば、「現代で最初の、黒人の自由の擁護者であるイギリス國民を

して……実行可能な⁽⁷⁾かぎり速かに、アフリカ、西インド諸島の黒人植民地に対し責任政府の権利をあたえさせよ」(傍点・引用者)という項目にも明らか⁽⁸⁾なように、自治の要求は遠慮がちである。これがさらに独、仏植民地ともなれば、植民地制度を否定するどころか、逆にその維持を前提としてただその経営方法に注文をつけているだけのよう⁽⁹⁾に思える。すなわち、「ドイツ帝国、フランス共和国をして、その偉大な過去にそむかず、植民地の真の価値はその繁栄と進歩にあるということ、および黒人と白人に対し同様に公正な正義こそが、繁栄の第一の要素であるということ、思い起させよ」というのがそのアピールの内容である⁽⁷⁾。もつとも、このほかに、アフリカ、中米の独立国家に触れて、「世界の諸国をして、最初の黒人国家であるアビシニア、ライベリア、ハイチその他諸国の領土保全と独立を尊重させよ……」と主張しているが、これも現状維持につながる消極的なアピールにすぎない。比較的積極的な響きをもつたアピールは、「コンゴ自由国をして、世界的かつ偉大にして中心的な黒人国家たらしめよ。また、同国の繁栄をして、金銭と商業の面ばかりでなく、黒人人民の幸福と真の向上といった面でも考慮せしめよ⁽⁹⁾」という、やや奇抜な要請ぐらいのものである。

ところで、決議の調子がこのように弱かつたのは、あながち起草者であるデュボイのせいとばかりはいえない。第一、この会議の組織者は前述のようにシルヴェスター・ウイリアムス(同会議書記長)であつたし、それに会議の指導的人物はアメリカ・メソジスト・エビスコーパル・シオン教会のアレキサンダー・ウォルターズ司教(パン・アフリカ協会会長)であつて、デュボイではなかつた。したがつて、デュボイの姿勢がそのまま決議に反映されたとは考えにくいのである。しかもV・B・トムプソンによれば、「この当時、自治というものがシルヴェスター・ウイリアムス氏の心中になかつたことは明らか⁽¹⁰⁾なのであつて、それだけに決議が自治の要求において弱かつたのも仕方ないことであつた。

結局シルヴェスター・ウイリアムスが一九〇〇年パン・アフリカ会議を組織した直接の動機は、ジョージ・パドモアも指摘しているように、アフリカにおけるイギリス帝国主義者の侵略的な政策——たとえば南アではアフリカ人の父祖伝来の土

地がボーマ人、イギリス人によつて強奪されかかつており、またセシル・ローズの南アフリカ特許状会社が南アからさらに中部アフリカにまでその触手をのばしつつあり、さらに西アフリカにおいてすら、ゴールド・コーストの総督ウィリアム・マックスウェル卿がファンティ部族の土地をイギリス王室の領地にしようとしていた——に抗議しようというところにあつた。⁽¹¹⁾ 会議の開催地としてロンドンを選んだのには、イギリスの首都で「抗議」集会をおこなつた方が効果的であると判断したからでもあつたのである。

しかし実際には、会議では英領アフリカだけでなく、全アフリカおよび西インド諸島までもが討議の対象とされたことは、さきにも一部引用した「決議」によつても明らかである。そして結局一九〇〇年パン・アフリカ会議の目的は、シルヴェスター・ウィリアムスの動機を越えたものとなつた。すなわち、V・B・トムプソンがバドモアやウォルターズを引用しつつ示したところによると、一九〇〇年パン・アフリカ会議の目的は、つぎのように整理される。

- (1) 白人植民者の侵略に対する抗議の議場として活動すること
- (2) アフリカ人を帝国建設者の略奪からまもるといふ、イギリス人の伝道者的、奴隷廃止論者的伝統に訴えること
- (3) 世界中のアフリカ(希)人をして、相互にヨリ緊密な関係をもたせ、かつコーカシア人種とアフリカ人種とのあいだにヨリ友好的な関係をうちたてること

- (4) 文明諸国に居住するすべてのアフリカ人種に完全な権利を獲得させることを目指す運動を開始し、かつアフリカ人種の企業的利益を増進すること⁽¹²⁾

こうした目的がどの程度達成されたかを測定するのは困難であるにせよ、一九〇〇年パン・アフリカ会議が「抗議の議場」として、アフリカがその息子たちを通じて、西欧の支配のいきすぎに反対する声をかすかにあげはじめたことを示した⁽¹³⁾ことはたしかであり、しかもこの抗議に対してヴィクトリア女王がジョセフ・チェンバレンを介して「現住民諸人種の

利益と福祉を無視しない」旨の約束をあたえたのであるから、若干の反響はあつたといふべきであらう。さらにこの会議が実践面でニグロ国際主義の始発点となつたことも評価しておかねばならない。アフリカからの参加者がほとんど皆無に近かつたとはいえ、一応欧米世界のアフリカ系人のあいだに、「地理的な境界線によつて決定されなければ制約もされない連帯関係」⁽¹⁵⁾（トムブソン）が現実には萌芽しはじめたことを、この会議は告げたのである。

ところで、デュボイ自身はこの一九〇〇年パン・アフリカ会議をどうみていたであらうか。いささか驚いたことには、デュボイはこの会議についてその著書のなかでほとんど触れていない。たとえば、のちにかれが出版した二冊の自伝（『暁闇・一九四〇年』、『W・E・B・デュボイ自伝』・一九六八年）のなかには、この会議および先駆者シルヴェスター・H・ウィリアムズに関する記述がまつたくみあたらないのである。この会議に出席し、決議委員会・委員長として「世界の諸国への請願」の起草にあつたことは、デュボイのパーソナル・ヒストリーのなかでは取るにたらないことであつたのであらうか。また、デュボイ自身がパン・アフリカニズムについても多く語つていると思われる論文「パン・アフリカ運動」（一九四五年にパン・アフリカ会議国際議長の手書で執筆）でも、一九〇〇年パン・アフリカ会議についてはわずか一三行を割いてはいるにすぎないのである。そのなかでデュボイは一九〇〇年パン・アフリカ会議の経過をこれ以上簡単にできないくらい簡単に説明し、せいぜいのところ前述のような「ヴィクトリア女王の約束」と、「この会議が……〈パン・アフリカ〉という言葉をはじめて辞書のなかにもちこんだ」という点にその意義をもとめているにすぎないように思われる。そして、このような一九〇〇年パン・アフリカ会議に対する軽視は、その後一九一九年にデュボイ自身が組織したパン・アフリカ会議を第一回会議と呼称していることによつても明らかに示されている（事実、デュボイに限らず大部分の論者が一九一九年会議を第一回パン・アフリカ会議としている。例外はコーリン・リーガムぐらいのものであらう）⁽¹⁷⁾。

しかし、そうしたデュボイの評価が正当であれ不当であれ、一九〇〇年パン・アフリカ会議の組織者であつたシルヴェス

ターウィリアムスは会議後数年をいであつて没し、「会議はアフリカそれ自体には深い根をおろさず、その運動と理念は一代のあいだ死んだままになつた」⁽⁸⁾(デュボイ)のである。

- (1) W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, (1903), New York: The Blue Heron Press, 1953, p. 13.
- (2) Du Bois, "The Conservation of Race," *The American Negro Academy, Occasional Papers*, No. 2, Washington D.C.: 1897, p. 10.
- (3) E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism: A Search for an Identity in America*, New York: Dell Publishing Co. Inc., 1962, Fourth Printing, 1968, p. 40.
- (4) Du Bois, "The Conservation of Race," p. 12.
- (5) 「民族の離散の過程」の著者 Vincent Bakpetu Thompson, *Africa and Unity: The Evolution of Pan-Africanism*, London & Harlow: Longmans, Green & Co. Ltd., 1969, pp. 319-321. 以下略す。
- (6) *Ibid.*, p. 320.
- (7) *Ibid.*, p. 320.
- (8) *Ibid.*, p. 320.
- (9) *Ibid.*, p. 25.
- (10) *Ibid.*, p. 25.
- (11) George Padmore, *Pan-Africanism or Communism?: The Coming Struggle for Africa*. London: Dennis Dobson, 1956, p. 117. 以下略す。
- (12) Philippe Decroene, *Le Pan-Africanism*, Collection QUE SANS-JE? No. 847, Rev., ed., 1964. 吉田義典『現代アフリカの政治思想』・文庫パブリック・一九六四年・白水社・一九七〇年改訂版の訳文を参照。
- (13) Thompson, *op. cit.* pp. 24-5.
- (14) *Ibid.*, p. 25.
- (15) Du Bois, *The World and African: An inquiry into the part which Africa has played in world history*, An Enlarged ed., New York: International Publishers, 1965, p. 7.
- (16) Thompson, *op. cit.*, p. 25.
- (17) Du Bois, "The Pan-African Movement," in Padmore ed., *Colonial and Coloured Unity, A Programme of Action: History of the Pan-African Congress*, London: The Hammondsmith Bookshop, Ltd., 1963, p. 13.
- (18) Colin Legum, *Pan-Africanism: A Short Political Guide*, Rev., ed., New York, Washington & London: F. A. Praeger, 1965, p. 24. 以下略す。

されたい。

(81) Du Bois, "The Pan-African Movement," p. 13.

三、谷間の時期のパン・アフリカニズム

前章で述べたごとく、一九〇〇年パン・アフリカ会議はニグロ国際主義を象徴する史上初の会議として、ひととおりの成果をおさめたにもかかわらず、それ以上運動は発展しなかつた。実際デュボイが主張したごとく、今世紀初頭にあつては、その人口八〇〇万といわれた合衆国黒人こそが、あらゆる点からみて、全世界のアフリカ(系)人のあいだの連帯の強化と、その解放とについて前衛的役割をはたすべきであつた。しかし、「おそらく、合衆国における黒人問題のたかまりが一時的にアメリカ黒人の視野をせばめたためであろうが、一九一四年にいたるまで、パン・アフリカニズムはアメリカ黒人のなかにあつて、忘れ去られはしないまでも、眠つたままになつていた」(G・シェパースン)⁽¹⁾のである。

たしかに今世紀初頭にあつては、合衆国内部の黒人問題は大きな動きをみせていた。そして、黒人運動の路線についても、たとえば黒人に職業教育を施し、経済的自立によつて黒人の地位向上をはかろうとするブッカー・T・ワシントンのタスケギー方式と、デュボイに代表されるような黒人の完全平等を目指す方式との対立があり、大いなる論争をまきおこしてゐた。さらにデュボイは前述のように、一九〇五年には二八人の黒人知識人とともにナイアガラ運動を結成し、これを「あらゆる形の人種隔離、人種差別、そして附随的にはあるがわずかな給料で黒人の権利を売り払いかつ抗議をする勇氣をくじいてしまうワシントンの漸進的・妥協的な政策とたたかうための、数州に支部をもつ全国的な抗議組織」⁽²⁾にしようとした。このナイアガラ運動は一九〇九年には発展的に解消して全米黒人向上協会(N.A.A.C.P.)となるが、このN.A.A.C.P.は、「権利の平等を推進し、合衆国市民間の身分制度もしくは人種的偏見を撲滅すること。有色人市民の利益を増大させ、公平

な選挙制を確立すること。法廷における正義、子弟の教育、能力に応じた職業、そして法のもとにおける完全な平等を保証する機会をふやすこと⁽³⁾」を公式の目的としてうちだし、これ以後、長期にわたつて合衆国の黒人運動をリードすることになるのである。

ここでは、合衆国内部における黒人運動を論ずるのが目的ではない。ただ以上に若干述べたごとき、内部における黒人問題の発展が、合衆国の黒人運動を内向きのものにし、一九〇〇年パン・アフリカ会議によつて生命を吹きこまれたニグロ国際主義を事実上形骸化してしまつたということを述べれば足りる。そして、かかるニグロ国際主義の積極的主張者であるはずのデュボイすら、「ブッカー・T・ワシントンとの論争、ナイアガラ運動、講義、著述——とくに、かれにとつて依然不可欠であるアトランタ大学研究の出版——といつたヨリ緊急の仕事へと転換した」(R・W・ローガン) ような状態であつたから、パン・アフリカニズムが死んだと評せられたのも当然であつたかもしれない。

しかし、比喩的に用いられたはずの「死んでしまつた」という言葉を文字通りに受けとり、ニグロ国際主義が第一次大戦までまつたく息絶えたままであつたというふう⁽⁴⁾に理解しては、誤りである。たとえば、デュボイのナイアガラ運動は「それ自身のパン・アフリカ部をもち、アフリカ知識人と文通して⁽⁵⁾いた」し、またデュボイの論争の相手であるブッカー・T・ワシントンも、別のパン・アフリカ会議を一九〇六年当時構想に⁽⁶⁾えがいていた。もつとも、E・M・ラドウィックによれば、「ワシントンは、⁽⁷⁾一種の土着民の保護者」として活動する白人の科学者、探險家、牧師、教育者などから主として構成される組織を考えていた」のであるから、名称はパン・アフリカ会議でも、その性格はかなり異質である。そしてまた、活動の具体的内容については「アフリカに対する産業教育を薦めていた」ということであり、したがつて、ワシントンの場合は、タスケギー運動の国際版、アフリカ版と考えるとよいであらう。

ところで、この間デュボイ自身の「パン・アフリカ」的意識はどう発展したであらうか。政治的側面ではデュボイのパ

ン・アフリカ意識はほとんど前進してはいなかつた。その代り文化的側面ではデュボイの「アフリカの過去」に対する関心は急激に高まつていた。R・W・ローガンによれば、「一九〇六年に、アメリカの卓越した人類学者フランツ・ボアスがデュボイの問題意識に新しい側面、すなわちサハラ以南のアフリカにおける黒人王国の歴史という側面をつけくわえた」⁽⁸⁾。そして、こうした文化的側面での関心の高まりが、デュボイを一九一一年の第一回万国人種会議へと導くのである。

一九一一年七月にロンドンで開かれたこの第一回万国人種会議は、デュボイ自身の説明によれば「英国倫理文化運動の後援をえて活動していたその組織者、聡明なグスタフ・スピラーの手で、細心の注意と完璧さをもつて計画されたものであり……異例と思えるほど多くの著名人が参加し、わたしはフェリックス・アドラーとともに合衆国を代表する共同書記に指名された」⁽⁹⁾。そしてこの会議は「もしこんなに急に世界大戦が起らなかつたら、世界の文化史において新紀元を画していたであろう」⁽¹⁰⁾。ような、重要な会議だつたのである。しかし、この会議が直接デュボイのパン・アフリカ概念を發展させるうえで即効薬として機能したわけではないようである。たとえば、「一九一一年七月にロンドンで開かれた人種会議において、デュボイは、人種の世界的規模の側面といつたテーマ、あるいはブラック・アフリカ諸王国の歴史といつたテーマを發展させなかつたように思われる」⁽¹¹⁾というR・W・ローガンの言葉は、このことを裏書きしているように思える。

このように、全体として見てたしかに一九〇〇年パン・アフリカ会議から第一次大戦勃発までの時期は、パン・アフリカニズムにとつて谷間の時期であつた。ふたたびローガンによれば、万国人種会議においてすら、「ロンドン・タイムズの記事は、だれ一人としてパン・アフリカニズムを論ずる演説家がいなかつたことを示していた」⁽¹²⁾。そして、デュボイ自身ですら、その演説のタイトルは「世界ではなく」「合衆国における黒人種」(傍点・引用者)であつたのである。

しかし第一次大戦の勃発とともに、合衆国の黒人運動は、ようやく国際的視野をもちはじめた。そして、デュボイ自身も、戦争の「帝国主義的性格」に着目し、一九一五年五月には「アトランティック・マンスリー」誌に「戦争のアフリカの

根源」と題する一文を発表して、アフリカそのものに対する関心を強く示しはじめたのであつた(ついでながらいうと、G・シュパースンによれば、この「戦争のアフリカの根源」と題するデュボイの論文は『帝国主義論』におけるレーニンのテーゼ——「戦争の植民地的起源に関するテーゼ」——に先行するものであつた)⁽¹³⁾。デュボイはこの論文のなかで「われわれは民主主義の理想を、黄色、褐色、黒色民族にまで拡大しなければならない」と述べ、また「一民族が他民族をその同意なしに支配することは、従属民族が黒人であれ白人であれ、やめなければならない」と主張して、パン・アフリカニズムという言葉こそ使わなかつたが、自治の原則を明確にうちだしはじめたのである⁽¹⁴⁾。

さらに一九一七年になると、デュボイは一層明確かつ具体的にアフリカの自治を主張しはじめる。すなわち、デュボイは、「ドイツ領とベルギー領コンゴをもつて形成さるべき新アフリカ国家」を提案し、翌一九一八年には、できうるならばそれにウガンダ、仏領赤道アフリカ、アンゴラ、モザンビークも含めるよう主張したのである⁽¹⁵⁾。

かくてデュボイの認識とその提案が国際性とアフリカ性を回復し、かつ自治の要求を明確にもりこむようになるのと同時に、パン・アフリカニズムの眠りは浅くなり、その覚醒の時が近づいてくるのである。

- (1) George Shepperson, "Notes on Negro American Influences on the Emergence of African Nationalism," in W. J. Hanna, ed., *Independent Black Africa: The Politics of Freedom*, Chicago: Rand McNally & Co, 1964, p. 201.
- (2) Gunnar Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*, New York: & Evanston Harper & Row, Publishers, 1962, p. 742.
- (3) ランダスタン・ボーマズ『自由のための戦列——N.A.A.C.P.の記録——』、二二頁。
- (4) Rayford W. Logan, "The Historical Aspects of Pan-Africanism, 1900-1945," in AMSAC, ed., *Pan-Africanism Reconsidered*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1962, p. 39.
- (5) Elliott M. Rudwick (With a new preface by Louis R. Harlan and an epilogue by the author), *W.E.B. Du Bois: Propagandist of the Negro Protest*, New York: Atheneum, 1968, pp. 209-10.
- (6) *Ibid.*, p. 209.

- (7) *Ibid.*, p. 209.
- (8) Logan, *op. cit.*, p. 40
- (9) Du Bois, *Dusk of Dawn: An Essay Toward an Autobiography of a Race Concept* by W.E.B. Du Bois, (1940), New York: Schocken Books, 1968, p. 230.
- (10) *Ibid.*, p. 230.
- (11) Logan, *op. cit.*, p. 40.
- (12) *Ibid.*, p. 41.
- (13) Shepperson, *op. cit.*, p. 201.
- (14) Logan, *op. cit.*, p. 41.
- (15) Francis L. Broderick, *W.E.B. Du Bois: Negro Leader in a Time of Crisis*, Stanford: Stanford University Press, 1959, p. 129.

四、一九一九年パン・アフリカ会議とデュボイ

——パン・アフリカニズムの復活——

一九一四年における第一次世界大戦の勃発を契機として合衆国の黒人運動が国際主義的視野をもつにいたり、デュボイ自身も国際性、アフリカ性をいちじるしく回復したことは前章で述べた。この結果、全米黒人向上協会(N.A.A.C.P.)は、大戦終了後バリ講和会議をまえにして、デュボイが提案したつぎのような綱領を採択した。

第一に、旧ドイツ植民地を国際化し、「組織的な文明の指導」下に部分的自治へ向かわせること

第二に、ドイツ領アフリカの族長や黒人知識人、その他の教育あるアフリカ黒人、アメリカ黒人、および西インド諸島・南米の教育ある黒人——かれらはすべて提案せられたパン・アフリカ会議を通して発言する——によつて代表される世論に基礎をおいた、これら植民地のための計画を作ること

第三に、科学、教育、コミュニケーション、博愛といった近代文化の長所を、「家族、部族を通じて地方自治にいたるまでの奇妙に効果的なアフリカの諸制度」と融合させること⁽¹⁾

この時点では全米黒人向上協会(N.A.A.C.P.)は、パン・アフリカ会議に対して、比較的積極的だったのである。

やがてパリ講和会議が近づくと、全米黒人向上協会はデュボイに対して、「黒人兵士の処遇に関する調査および黒人兵士の参戦に関する歴史的記録の蒐集、完成のためにパリへいくよう」⁽²⁾要請した。かくてデュボイは報道関係者専用船「オリザバ」号を利用して、一九一八年十二月にパリへ赴くのである。

デュボイは右の調査をおこなったのちもパリに残り、一九一九年二月十九日―二十一日に、いわゆる「第一回」パン・アフリカ会議を開催した。この「第一回」パン・アフリカ会議を開催するにいたったその理由を、デュボイ自身はつぎのように説明している。

「すでにわたしや合衆国の多数の黒人たちは、アメリカ黒人や世界の黒人が講和会議になんらかの方法で代表をおくることが得策でもあり必要でもあると話していた。アフリカの諸問題が論じられるであろうし、人種差別の問題がもちあがるであろうが、われわれの知るかぎり、黒人にみずから発言することを許す準備はなかつた。われわれはある程度の資格を有する代表を送ることを提案したが、当時の戦時規制でそれは不可能であつた。わたしがいくということが分つたとき、わたしはかれらの代表として派遣されるのだから、パリでパン・アフリカ会議を招集しようと決心した」⁽³⁾

しかし、この時点で、しかもパリでパン・アフリカ会議を開催するのは極めて困難なことであつた。アフリカに多くの植民地をもち、しかも同化主義に基礎をおいた植民地経営をおしすすめてきたフランスとすれば、自国の首都で講和会議の直後にこうしたデモンストレーションをアフリカ(系)人によつて組織されるのは、まことに好ましくならざることにながいないかつた。事実、合衆国国務省もフランス政府のこうした反応を考慮して、パン・アフリカ会議に出席することを希望する合衆国黒人に対してはパスポートの発行を拒否したりしている。⁽⁴⁾しかしながら結局、セネガル出身のアフリカ人でフランス下院議員であつたブレーズ・ディアニーの支援をえて、デュボイはジョルジュ・クレマンソー仏首相から、パン・アフリカ会議の開催許可を手にいれたのであつた。「広告をしてはいかん。がおやりなさい」というのが、クレマンソーの許可の言葉で

あつた。⁽⁵⁾

こうしたいきさつをへて開催された「第一回」パン・アフリカ会議には、アメリカ黒人一六、西インド諸島黒人二一、⁽⁶⁾アフリカ人一二を含めて、合計五七名の代表が出席した。参加国は一五、そのうち九カ国（正確には九地域というべきであろう）はアフリカであつた。会議の会長にはブレーズ・ディアーニユが選出され、デュボイ自身は書記長となつた。会議は、数年まえからデュボイがおこなつていた提案を反映して、ドイツ植民地の国際化をとくに強く要求した。デュボイ自身の説明によれば、ドイツ植民地を他の植民地列強に領有させるかわりに、国際機関にこれを委ねることを会議は要求し、そして「こうした思ひつきから、〔国際連盟の〕委任統治委員会が生れた」⁽⁷⁾ことになるが、R・W・ローガンは、合衆国の講和会議代表団の一員で植民地問題を担当していたジョージ・ルイス・ビアがすでに一九一七年当時その覚え書のなかでこうした構想をえがいており、それが委任統治制度の創設者であつたウィルソン大統領に大きな影響をあたえたのだということを根拠にして、デュボイの見解を否定している。⁽⁸⁾しかし、おそらくウィルソンは、ビアとデュボイ（およびパン・アフリカ会議）の双方から影響を受けたであらう。

ところで会議は、これ以外にもアフリカおよびアフリカ（系）人に関するいくつかの要求を決議のかたちでうちだした。その主なものをここに挙げればつぎのごとくである。

(a) 同盟および連合国は、すでに提議された国際労働法典と同様の、アフリカ原住民に対する国際的な保護のための法典を制定すること

(b) 国際連盟は、これら諸法律をアフリカ原住民の政治的、社会的、経済的福祉に適用することを監視する特別の義務を負つた、常設の部署を設立すること⁽⁹⁾

なお、決議は(c)として、「世界の黒人は、爾後アフリカ原住民およびアフリカ系人が以下の諸原則にしたがつて統治さるべ

きことを、要求する」と述べ、その諸原則として、「原住民に対して、みずから有益に開発しうるかぎりの土地の実質的所
有権を認めること」、「原住民の搾取および国土の天然資源の涸渇を防止するために、投資と利権は規制されるべきこととし
…：利潤は原住民の社会的・経済的利益のために課税されねばならないこと」、「奴隷制・体刑・強制労働を廃止し、労働条
件は国家によつて定められ、規制されるべきこと」、「原住民に国語教育、技術教育を受ける権利を認めること」、などを列挙
しているが、さらに「国家」という見出しの原則をつけくわえ、そのなかで、自治の問題をつぎのように規定している。

「アフリカ原住民は、政府のために原住民が存在するのではなく原住民のために政府が存在するという原則にしたがい、かれらの発展の
程度に応じて速かに政府に参加する権利をもたねばならない。かれらは古来の慣習にしたがい、地方的、部族的政府に即時参加を認めら
れるべきこととし、かつこの参加は、教育と経験が進むにつれて、ヨリ高次の政府職へと漸次上昇し、最終的には近い将来アフリカがア
フリカ人の同意によつて統治されるにいたる、という形になるべきこととする…⁽¹⁰⁾」

このような「第一回」パン・アフリカ会議の主張は、一九年まえのパン・アフリカ会議の決議に比べれば、はるかに実行可
能性をもっている。「ニューヨーク・ヘラルド」紙(一九一九年二月二十四日)が、「パン・アフリカ会議で起草された計画に
は、道理に合わないものはない⁽¹¹⁾」と評したのも当然である。また、決議で要求した「自治」も「即時・完全自治」で
はなく、「漸進論的・段階論的自治」にすぎなかつたが、それだけに実行可能性には富んでいたといふべきであろう。さら
にこの「第一回」パン・アフリカ会議が一九〇〇年パン・アフリカ会議に比較して、よりパン・アフリカニズム的であつた
のは、その決議が前回とちがつて、「黒人一般」よりも「アフリカ人」を強調している点に、顕著にあらわれている。す
なわち、一九一九年会議の方が、はるかにアフリカ・ナショナルリズム、的性格が濃厚なのである。そしてこの点を評価して、
ウイリアム・Z・フォスターはその著『黒人の歴史——アメリカ史のなかのニグロ人民——』においてマルクス主義の立場
に立ちながらもなお、一九一九年のパン・アフリカ会議を「非常に有意義な事件」と称し、「このパン・アフリカ会議が重

要なのは、それがアメリカニグロ人の被抑圧植民地人民との団結を強調したこと、そしてとくにアメリカニグロ人民の民族的感情を表明したことであつた。……この会議を媒介として、ニグロ人民は一つの民族として行動しまた国際的な組織のまゝにその不満を訴えて、その後いくたびかの機会がその模範とした先例を開いた」と述べている。⁽¹²⁾

ともかく、合衆国黒人運動を中心として一九一四年以後徐々に国際性とアフリカ性を二つながら濃くしてきた世界の黒人運動が、ここにいたつてパン・アフリカ・ナショナリズムを象徴するような国際会議を成立させたことは、特記すべき事件であり、したがつてこの一九一九年会議は単にパン・アフリカニズムを復活させたというだけでなく、パン・アフリカニズム史の質的転換をしるしづけた会議として、評価してよいであらう。そしてこのような質的転換をもたらした客観的条件は、第一次世界大戦とその政治的・経済的・社会的余波であつたであらうが、しかし、主体としてのデュボイの果たした役割は、これをいくら評価しても大にすぎることはないであらう。そしてこれ以後のパン・アフリカニズムは、一九二二年の「第二回」パン・アフリカ会議をピークとし、その後は下降線をたどりつつも一九二七年の「第四回」パン・アフリカ会議まで、一応その「活動期」を維持するのである。

- (1) Broderick, *op. cit.*, p. 129.
- (2) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 260.
- (3) *Ibid.*, p. 260
- (4) Rudwick, *op. cit.*, p. 212.
- (5) Du Bois, "The Pan-African Movement," p. 15.
- (6) デュボイの自伝 *Dusk of Dawn* (p. 262) では西アフリカ諸島からの代表は二〇名となつてゐるが、おなじデュボイの著作 *The World and Africa* (p. 10) によつて "The Pan-African Movement" (p. 15) では二二名と記してゐる。しかしその他の文献をも参照した結果二名がたまたまと判断した。
- (7) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 248; *The World and Africa*, p. 11; "The Pan-African Movement," p. 16.
- (8) Logan, *op. cit.*, p. 42.
- (9) Legum, *op. cit.*, Appendices, p. 151; Du Bois, *The World and Africa*, p. 11.

- (10) Legum, *ibid.*, pp. 151-2; Du Bois, *ibid.*, pp. 11-2.
(11) Du Bois, "The Pan-African Movement," p. 17.
(12) William Z. Foster, *The Negro People in American History*, New York: International Publishers, 1954. 貫名美隆訳『黒人の歴史——アメリカ史のなかのニグロ人民——』一九七〇年・大月書店・四四三頁(なお、訳語統一のため一部修正した)。

五、結 論

以上の諸章においてわたくしは、前期的パン・アフリカニズムの形成過程を概述し、理念・運動の起伏とそれぞれの時期の特質、さらにこの間にはたしたデュボイの役割等について論じた。主要な論点を改めて整理すれば、まず第一に、一九〇〇年パン・アフリカ会議によつて生を享けた前期的パン・アフリカニズムは当初は「人種」に力点をかけたパン・ネグロイズムとしての性格が強かつたということであり、第二に、ながい谷間の時期をへたのち第一次世界大戦の勃発によつてパン・アフリカニズムはニグロ国際主義の復活というかたちをとりつつ上昇線をたどりはじめ、さらに象徴的には一九一九年のいわゆる「第一回」パン・アフリカ会議を契機としてその力点を「人種」から「アフリカ民族」へ移しつつ「パン・アフリカ・ナシヨナリズム」へと転換しはじめた、ということである。第三に、デュボイ自身も概略これと同様のコースをたどつたという点も重要である。実際そうした意味で、デュボイの歴史のある特定の一面がそのまま前期的パン・アフリカニズムの歴史であつたとさえいえるほどである。

しかし、一九一九年パン・アフリカ会議がパン・ネグロイズムからパン・アフリカ・ナシヨナリズムへの転換をしるしづけたからといつて、その質的転換を過大に評価してはならない。すなわち、この時期のパン・アフリカニズムは、その強調符を「人種」から「アフリカ民族」におきかえたとはいえ、そしてその意味でナシヨナリズムになつたとはいえ、その転換をドラマティックなものとして把握し、この時からパン・アフリカニズムが積極的な闘争の姿勢をとるようになったという

ふうに誤解してはならないのである。いいかえれば、一九一九年に質的転換をみた当時のパン・アフリカニズムも、こんにちに至るまでのその歴史全体のなかで把握すれば、結局はまだ消極的な抗議運動の枠を破りきっていないのである。この時期のパン・アフリカニズムの評価に関して、もうひとつ、つけくわえておかねばならない。E・U・エシェンハウドムは、一九一九年パン・アフリカ会議に関して、「一九一九年にデュボイはパン・ネグロイズムを、アフリカの政治的統一を求めるパン・アフリカニズムへと変形させた⁽¹⁾」と述べているが、これは誤りである。一九一九年の決議のなかには「アフリカの政治的統一」を求めるような文言は全然みあたらない。パン・アフリカニズムがアフリカの政治的統一を主要な目標として設定したのは、それからさらに四半世紀後、一九四五年の「第五回」パン・アフリカ会議によつて、運動がアフリカ人ナショナルリストの手に引きつがれてから後である。

(1) Essien-Udom, *op. cit.*, p. 40.